

---

# Angel Beats - 白翼の乙女 -

皇天野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Angel Beats - 白翼の乙女 -

### 【Nコード】

N0261Y

### 【作者名】

皇天野

### 【あらすじ】

音無と共に死んだ世界戦線通称SSSに入隊した葵と毒舌で攻撃的な生徒会長補佐であり天使と名乗る白羽とのオリジナルストーリーが今始まる。

## 第0話 序章

目が覚めれば出る「……………もう朝か」や「……………っ！やばい！寝過ぎした！」など、景色、時間、太陽の明るさ、家族の慌ただしい声色を捉えて今自分がいる状況を把握した時に自然と漏れる言葉を呟いてしまうだろう。

なら、目が覚めれば記憶にない知らない風景に時間が把握出来ない月が見える夜、  
そして、曖昧な自分の存在の認知。

まさにここはどこ？私は誰？的な状態だ。

果たしてこんな状況で不意に漏れる言葉を呟くのか……………。

答えは。

「……………ハア……………」言葉でもない、幸せを逃がすため息だった。

本当にどこよ？見た感じ学校のようにけど……………ハッキリ言って見たことない知らない学校が何故私がここにいるのか？

そしてどうして私は記憶が曖昧なんだろうか？思いだせそうで思いだせない記憶喪失者。

まるで死人だなと思うと、またため息をついてしまう。

「さて、どうするか……………」

とりあえず病院か警察かな？そこに行けばなんとかなるだろうと、行動した時だった。

「アホ面でどこに行こうとしているのかしら？」

唐突に透き通った女の子からの悪口。いきなり悪口言われてムカツとし、振り替えれば黒髪の膝辺りまである長すぎロングヘア、容姿を見れば大和撫子の美貌をもった絶世の女子高生。

思わずその魅力にさっきの悪口を許してしまいそうだった。いやいや、いきなり悪口言われてムカツとしない人なんていないだろう……多分。

まあ、でも人がいて助かった。なんせ自分が誰なのか場所すら知らないからね。

「すみませんが病院どこかわかりますか？もしくは……」

「病院なんてないわよ」

即答ですかさいですか……って病院なんてない？

「じゃあ、ここはどこですか？ちよつと迷子になってしまいました」

「その歳で迷子なの？」

「わ、悪かったですね！」

けして人前で記憶喪失みたいなもので場所と自分がわかりませんとか言ってみなさいよ……きっと信じてもらえず笑われる！

「そんなお馬鹿に教えあげるわ」

「お馬鹿は余計だ」もつため口でいいよね？

「ここは……そうね、天国かしらね」

「天国町とかそう言うの？」

「ハッキリ言っただろうがよさそうね」

天国と言われた時点で薄々気がついてしまっていた。だから冗談ばい雰囲気を作り出していたけど……。

「死んだ世界……別のところでは死んだ世界戦線と言うべきかしら？」

儚くも現実と言うもので壊されてしまった。

彼女の言っていることは嘘でもからかいでもない。けど……それってつまり自分の存在を否定しているもので信じきれなかった。

「う、嘘つくなよ！死んだ世界とかありえないじゃない！どうやって証明出来るのよ！」

「そうね……言葉で言ってもわからないから、その身体に教えてあげるわ……ハンドソニック」

彼女の左手からSFのように光る剣を現れてた。

一瞬の恐怖を覚えた時には。

「がはっ」

その剣にブスッと刺されてしまった。

「っ…………っ…………！」

声に出ない強烈な痛みと全身に力が抜けて瞼が重くなる。

「私は生徒会長補佐の白羽……………そうね、天使と言つべきかしらね」

「てん……………し……………？」

「そしてようこそ、葵さん」

ここからはよく覚えてないまま私は二度目の死を経験した。

## 第一話：入隊

「うわああああっ!!」

恐怖の刺りに身体をあちこち必要以上に触る。

「な、何もない……………」

ホツとしてようやく意識が回る。強烈な痛みは現実味があつて本当に刺されたかと思うと背筋がゾツとする。

そう、全部悪夢だったんだ。

あの悪口大和撫子もSFみたいな剣も死んだ世界も天使とか名乗る奴とかも全部。

「現実なのね……………」

その証拠に着ていた学生服が血色に染まっけていて胸あたりに穴が出来ていた。これは刺された証拠ね。

そして悪夢だったら何故私は記憶が曖昧なんだって言うこと。

悪口大和撫子…………天使って言ってたっけ？名前は…………白羽。

彼女が言っていたことは本当だったんだな。

とりあえずどうしようかな…………服は穴が空いているし血がついているし…………あれ？

ふと目についた丁寧に畳んであるセーラー制服が置いてあったのでそれに着替えた。

この学校の制服？いや、色が違うし……と言うか誰がこの制服を置いていったの？それに保険室へ運んでくれたのは？

「……………」

……………情報が少ないか、とりあえず行動あるのみかな？

「うわああ……………何でここで殺人現場起こっているのよ……………」

ここにいと逆に気分が悪くなる。

「さて、どうしましょうか……………」

とりあえずあの悪口天使には会いたくないとしてただ……………とりあえず適当に歩いてみるかな。

「校長室……………」

見るの久しぶりのような気がする……………。

校長なら何か知っているかも。

「失礼し……………」

ドアに手をかけた瞬間、顔面に強烈な痛みが走り目の前が真っ暗に



なった。

多分三度目の死を経験した。

『　　よか…………貴…………て』

ここは…………？あれ？何で身体が重いんだ…………？

それにこの声…………。

『無…………でバ…………さ…………った』

途切れてわからないけど聞きなれていて懐かしくて、冷たいけど暖かい声…………聞いているだけで安心するような…………。

『…………ミジンコ…………』

ミジンコ…………えっ？ミジ…………ミジンコ？

『…………フジツボ…………ヤドカリ…………フナムシ…………』

何で浜辺に集中した生物が聞こえるの！？と言つかさっきの冷たくて暖かい声はどうした！？

『フジツボ戦線…………』

どんな戦線だよ！？

『元に戻す！死んだ世界戦線！』

「ああもう！うるさいから黙ってよ！」

あ、身体が動ける……なるほど、さっきは夢だったんだ……それ  
でだ。

「ここ……どこですか？」

目が覚めたら人がたくさんいた。そして何故か八つ裂きにされた制服を着た男子もいた。

「あら、起きたのね。貴女もよく聞きなさい」

カチューシャの女の子は冷静に話しを続ける。達つてことは……この八つ裂きされた制服を着ている男子のことかな？

と言うか貴方達やたら冷静だよね……。

「この戦線本部にいれば安全なんだから、貴方達はそれを知って逃げ込んで来たんでしょ？」

「いや、知らない」

「それに安全どころか強烈な痛みが走ったんだけど……」

どうやら私達は同じようにやられたよね。

「て言うか来世があったとして人間じゃ無いかも知れないなんて冗談だろ？」

ここからは私の知らない話しなんでしょう……。

「冗談ではない」

格闘家っぽい人は一言で否定する。

「だって、そんなの確かめられないじゃないか！誰が見て来たのかよ！」

納得ができない八つ裂きの男子は疑問をぶつける。

ようするに……転生したら人間じゃないかもしれないってこと？

「八つ裂き男子君」

「それって俺のことかよ……」

だって服破けているの貴方しかないじゃない。

「確かめるのはともかく、人間意外にも動物例えば猫も犬もいるでしょ？」

「ああ」

「人間も猫も命があるのだから、次が人間だと限りないと思うよ。じやなきや猫と犬は人間と同じ自志がないって言うことなるんじゃないかな？」

私の半分の思いつきは八つ裂き男子君は少なからず納得したようだ。

「彼女の言う通りよ。でもね、ここからが大事な話しよ。あたし達が今までいた世界では人の死が無差別に無作為に訪れるものだった」  
そうとは限らないんじゃないかと挟もうとしたけど、質問されるので彼女の話しを最後まで聞くことに専念した。

「だからあらがいようが無かった。でもこの世界は違うのよ！天使にさえ抵抗すれば存在し続けられる！あらがえるのよ！」

天使ね…………。

あの悪口天使に抵抗すればいつまでも私のままでいられるってことか…………けどさ。

「でも待て。その先にあるのは何なんだ？お前らは何がしたいんだ？」

その疑問に八つ裂き男子君が問いかけた。

「私の目的は天使を消し去ること。そして世界を手に入れる！まだ来て間もないから混乱するのも無理ないわ、順応性を高めなさい、そして在るがままを受け止めなさい」

「そして戦うのか？天使と……………」

「ええ共にね」

さしのべた手を八つ裂き男子は掴もうと。

「早まるな！ゆりっ…ぶへっ！」

急に別の男子が現れては巨大なハンマーで校庭へ投げ飛ばされた。

わ、私も……そして八つ裂き男子もあなっていたのか？

「ここに安全に入るには合言葉が必要な訳。対天使作戦本部と言うわけ。ここ以外に安全に話し合える場所なんて無いわ」

その言葉に八つ裂き男子君は「少し考えさせてくれ」と言ったが力チューシャの彼女は「ここ以外でならどうぞ？」と脅かされた。それは私も含まれる。

それにしても天使ね……。

『私は生徒会長補佐の白羽……そうね、天使と言つべきかしらね？』

『そしてようこそ、葵さん』

葵さんか……それが私の名前なんだろう。

私は失った記憶と共にこの世界を知らなければならぬ。

あの悪口天使のことも……。

合言葉は神も仏も天使も無し……私と八つ裂き男子、音無は死んだ世界戦線……通称SSSスリーエスに入隊した。

「ところで貴女は何でSSSの制服着ているのよ？」

「さあ？置かれてたのを着ただけかな？」

本当に誰なんだろう……。

## 第二話：再開（前書き）

多分これからTKの台詞原作と比べて少ないかも（汗）

## 第二話：再開

SSSには様々な人達がいる。

カチューシャの女の子はゆり。あだ名はゆりっぺと言いSSSのリーダーの位置に値する。

そしてなんかちゃんぽらの男子は日向で。知的メガネかと思いきやバカの高松に特徴がないモブっぽい大山とやさぐれたあんちゃん藤巻に柔道五段の松下、尊敬を込めて松下五段と呼ばれているが……高校生って五段取れるの？そしてぶつとばされたゆりLoveの野田に忍者っぽい椎名と英語口調のTKとGirls Dead Monster、通称ガルデモと言うバンドのボーカルの岩沢とその他大勢。

そしてこの世界では私達死んだ人間と元々いる生徒、NPCの模範生とで別れている。

非常に出来たもので簡単に言えばゲームのモブキャラと私達人間が合わさった存在と言うべきか。

ともかく人間だ。

そして歳を取らないそれは私達死んだ人間も同じ、自分達が彼らのように模範的な行動をとると消えてしまう。

だから私達SSSは存在続けるためにあらがつ。

対する敵は天使。



天使の役目は模範通りに行動していれば無害。だが、従わない場合は口頭で注意してくる。ちなみに天使の実力行使はこちらが仕掛けなければこないらしい。

まるで真面目な学級委員長だな、口は悪かったけど。

まあ……大体はわかってきた。

「はい、二人とも初めてでも撃てるわ」

夜になって場は校長室。私と音無はゆりから銃を渡された。

まあ……なんと云うかさ。

「近距離用の武器とかないの？」

思ったことをゆりに尋ねてみた。

「近距離用ね……あ、丁度いいのがあったわ。はい」

「なにこれ？」

「トンファーよ」

何故聞きなれない武器を渡すんだろうか？せめて野田のようなバルハートや藤巻みたいな刀が欲しかったが……ないより増しか。

「ありがとう」

すると突然に部屋が暗くなり、映画のようなスクリーンが現れる。

ゆりは何故か白いベレー帽を被る。

「まず貴方達には慣れてもらうためにいつもやっている簡単な作戦に参加してもらっわ。作戦名……オペレーション・トルネード」

作戦名を言った時に大山は「ええ？」と驚き。松下は「こいつはでかいのがきたな」と腕を組ながら呟いていた。

オペレーション・トルネード……なんて大袈裟な作戦名だ。本当に簡単なのか？

そう思っていたらだ……。

「生徒から食券を巻き上げる！」

「その巻き上げるかよ……！」

つい声がハモってしまう程のツツコミ。

本当に大袈裟な作戦名だな！

そして上手いこと考えたな！トルネードだけに巻き上げるって言うことか！

隣の音無はそのままツツコミを続けるが野田からバルハートを突きつけられた。

「まあいろいろと私もツツコミたいが……巻き上げるってどんなこととするの？」

「文字通り巻き上げるわ」

ゆりはパソコンを操作し、スクリーンの映像が写し変わる。巻き上げるだけなのに。

「いい？貴方達は天使の進行を阻止するバリケード班。作戦ポイント<sup>ト</sup>は食堂を取り囲むようにそれぞれ指定のポジションで武装待機。安心しなさい楽なところに置いてあげる」

「別に私は命令すればどこでもいいよ」

「強気だなお前」

新人だからなめられたくないだけよ日向。貴方は頑張って野田を抑えている

「そういいなさるなって。まあ細かい位置は後で大山君か高松君に確認して。岩沢さん今日も期待しているわ」

岩沢は「ああ」と一言返事をする。

「天使が現れたら確実発泡、それが増援要請合図となるわ。どこかで銃声の音が聞こえたら駆けつけるように。作戦開始時間は18時30分。オペレーション<sup>ことば</sup>、スタート！」

ちなみにこの作戦は平和的らしい。

と言っわけで配置についたけど……暇だな。

と言うかオペレーション・トルネード……食券を巻き上げるって上手いくのか？

さて……そろそろ時間かな？

作戦開始時刻になると音楽が聞こえる。岩沢の役目はライブをすることなのか？

続いて今度は銃声の音が聞こえる。

「現れたか……お返しに一発殺してあげようかしらね！」

あれ？下手したら私……危なくない？

「ごめん、ちょっと遅れ……た……」

私が到着した頃には皆発泡していた。

そして全員で一斉に射撃する。相手は天使だ……作戦では。

「葵！何をしている！？」

「日向……天使を撃っているんだよね？」

「そうだよ！君も会ったしょ！？天使を！」

確かに天使に会った……だけど彼女は会ってない！

「違う」

「違うって何が!？」

「私が会ったのは……彼女じゃない!!」

「えっ？」

その刹那。

「ぐはっ!？」

「野田!？」

何者かが野田を刺し蹴り飛ばした。

「ど、どう言うことだ!？」

「な、何であの子もハンドソニック使えるの!？」

皆が動揺して混乱する。状況を理解出来ないからだ。

だけど私はわかる。

「そう言うことなのね……」

「何が？」

音無はさらに知らないだろうね。それに皆も天使は小柄な少女だと

思っていた。

けど私の知っている天使はただ一人！

「お久しぶり……悪口天使！」

「お久しぶり……迷子のお馬鹿さん」

天使は二人いるってことをSSSの皆知った。

「な、何でお前も天使と同じようにハンドソニックが使えるんだよ！」

日向は悪口天使に疑問をぶつける。

「貴方達が知らなかっただけよ。一人を除いてね」

「私は悪口天使が天使だと思っていたのよ。皆とは逆」

「頭が理解出来ないからじゃないの？やっぱり馬鹿ね愚かねいっぺん死ねば？」

「うるさいこの腹黒天使！」

簡単なオペレーションのはずがまさかの乱入で皆混乱している。

それに……あの腹黒天使にはムカついているのでね。

「皆は腹黒天使に気にせずもう一人の天使を攻撃して」

「お、お前はどうするんだよ……………」

音無君。そんなの決まっているじゃない。

「あの腹黒天使を倒すのさ！」

トンファーは初めてだけど……………なんとしてやるよ！

「一人で突っ込んで、やっぱり馬鹿ね」

「さあどうかな！」

トンファーで彼女の身体に当てようと攻撃するけどハンドソニック  
と言っ手甲剣が上手く受けながされて避けられて全然当たらない。

けど私もなんとか避けたりトンファーで受け止めてなんとか彼女の  
攻撃を防げていた。

「ム力つくわね。馬鹿のくせに」

「それはこっちの台詞だ！」

皆は頑張って立て直しよう一人の天使を一斉射撃して時間を稼いで  
いる。

と言うかオペレーション・トルネードはまだなの？そろそろキツイ  
んですけど。

「貴女、あの集団に入ったのね」

「そうだけど何か!？」

「生徒会に入る気はない？貴女も天使になれるわ」

「断る！」

「そうよね。冗談がから本気だと思っていたら引くわ。と言つか貴女が存在自体引くわ」

「存在否定かよ！言い過ぎだろ！」

「これでもオブラートに包んでいるわよ？」

「嘘だ！」

右手の持つトンファーを落として素早く銃に持ちかけて彼女の足を発泡した。

「っ……………」

よし、動きが止まった！

「一発殴らせてもらっわ」

近寄って殴ろうとしたとき。

「ガードスキル、エンジェルウィング」

「ぶへっ！」



腹黒天使の背中から白い翼が生え、私を軽く羽で払い飛ばした。

「ちょっ、そんなのあり!？」

「ありよ」

天使の羽が生えた腹黒天使は何事なく立ち上がった。

「頭に輪が生えてたら完璧に天使だけど貴女は似合わないそうね」

「貴女は女の子には似合わないわね」

「どう言っことだよ!？」

「言葉通りの意味よ」

「男の子が似合ってことなのか!？」

「いえ、オカマが似合っているわ」

「そんなわけないでしょうが!！」

ツツコミの感じで銃で発泡するが彼女の天使の羽は包むように銃弾を防いだ。

「そんな使い方あり!？」

「頭悪いのね。ありよ」くそ……散々に弄ばれているよね私を。

天使と言つより悪魔だ彼女は。

それでだ、一発殴りたいが……トンファーでやっても銃でやっても拳でやってもあの羽が全部防いちゃうんだろ……。

ん？……空からなんか降ってくる雪？

いや、これは……食券？

「葵！取ったら撤退するぞ！」

「えっ、あ、うん！」

どうやら作戦は成功したので、私達は撤退した。

天使と黒天使は追いかけてもせずにただ見つめていた。

そして私達は巻き上げた食券を使って食事をした。ちなみに私は力ツ井、味の感想はジューシーで美味しかった。

次の日。

模範通りに行動したら消えるので屋上でサボっていた。

そこへ……。

「サボりなんて何？熱血先生に叱りたいのかしら？とんだマゾね」

この悪口で透き通った声。

「黒天使か……どうなったらそんなこと思いつけるのが不思議だわ」

「そうね、貴女の顔を見ると不思議と思いつくわ」

もうやだこんな天使……。

「馬鹿なんだから授業に出ていたら？あ、馬鹿だから今さら頭がよくならいみたいねごめんなさい葵」

「そんな悪意の塊で謝れてもム力つくわ！って……それ、私の名前……そう言えば何で私の名前つけたの？」

「正確には名字よ？」

「わかりずらいよ！」

天使ってNPCだね？こんなのも作り出すなよ神様！

「何で私に名字つけたの？」

「貴女が記憶ないから私がつけたのよ。ありがたいとおもいなさい」

思いたくないな……。うん、おもいたくない。

「それより、私の名字を呼んで欲しいわね。黒天使とか腹黒天使とか悪口天使とかそんなんじゃないわ」

「そんなこと気にするの？」

「なら私は貴女をピーはピーのピー君って呼ぶわ」

「わかった呼ぶから二度言わないでよ！」

平然と放送禁止用語を使ってくるとかバカじゃないの！そんな呼ばれ方したら私死ぬ！って……死ねないんだった。つか死んでいるし。

それで名字だっけか……確か、うん、そんなだったな。

「黒天使なのに白羽って名字おかしくないか？」

「黒天使とは名乗ってないわ。天使って名乗ったのよわかるかしら？馬鹿の葵さん」

「わかってたまるか！」

て言うかさ……私、敵である天使と会話してていいわけ？

不味くない私？

「馬鹿な葵さんは授業に出てさらに馬鹿になってなさい」

「どう言うことだよ！」

「言葉通りの意味よ」

そう言い残して彼女は去って行った。

「あんなに嫌な奴なのにたまに思うよ……………白羽は私達の敵なのか  
ってね」

やっぱり知らなければならない。

この世界のこと、私の記憶、そして……………黒天使のことを。

知らなければならいんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0261y/>

---

Angel Beats - 白翼の乙女 -

2011年10月31日02時15分発行